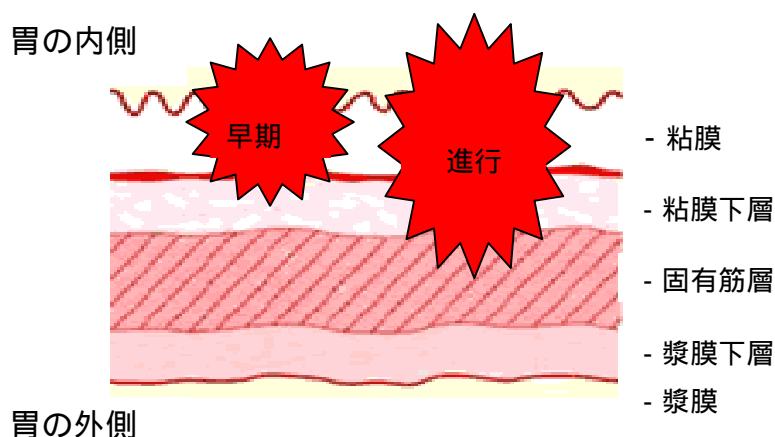


胃がんについて

胃がんとは？

胃の壁は内側から粘膜、粘膜下層、固有筋層、漿膜(しょうまく)下層、漿膜の5層になっています。胃がんは粘膜から発生し、次第に外側へ広がります(浸潤といいます)。浸潤が粘膜下層までにとどまるものを早期がん、それより深いものを進行がんといいます。



胃壁にはリンパ管や血管が豊富で、がんが進行するにつれてがん細胞がリンパ管に侵入し胃の周りのリンパ節に転移(リンパ行性転移)したり、直接血管内に入り血液とともに全身に流れ肝臓や肺などに転移(血行性転移)します。さらにがんが胃壁を貫き胃の外へ飛び散り、小腸・大腸などの臓器の外側を包んでいる漿膜に拡がることを腹膜播種性転移(ふくまくはしゅせいてんい)といいます。この転移が著明になると腹水が溜まる場合があります。

症状は？

みぞおちの痛みや、食欲不振、むかつきなどで、胃がん特有の症状はなく胃潰瘍や胃炎と大きな違いはありません。さらに早期胃がんではほとんど症状がありません。ですから早期発見のためにも毎年の検診が必要です。

検査・診断は？

血液検査だけで胃がんの診断は出来ません。胃透視(バリウムを飲む)・胃内視鏡検査(胃カメラ)が必要です。胃透視より胃内視鏡検査の方が小さながんまで発見することが可能です。胃内視鏡検査で病変があれば、その一部の組織を採って顕微鏡でがん細胞の有無を調べます。

胃がんと診断された場合には、CT検査や超音波検査などでがんの転移・拡がり具合を調べます。

胃がんの治療には？

基本的に日本胃癌学会のガイドラインに沿って治療します。治療の原則は確実にがんを摘出することですが、早期がんの中でも小さなものはお腹を切らずに内視鏡(胃カメラ)による切除も可能です。しかし多くの場合は、開腹で胃を切除(手術)し、胃周囲のリンパ節を摘出することが必要です。胃の切除範囲は、がんの部位、がんの拡がり、周囲リンパ節転移の状況により決まります。通常は胃の2/3～全部を切除します。さらに手術後には再発予防のための抗がん剤治療が必要な場合もあります。

手術後は？

手術後数日～1週間は絶飲食で、重湯から食事が始まり、順調なら約2週間で普通の食事となります。退院後は定期的に血液検査、CT検査などを行い、転移・再発の有無を調べます。

胃がんの予防は？

胃がんは男性で最も多いがんで、女性では乳がんに次いで多いがんです。胃がんにならないためには、禁煙することはもちろん、暴飲暴食を控え偏った食生活を送らないことが基本ですが、残念なことに現在のところ確実に予防する方法はありません。しかも、治療法が進歩したとはいえ、発見が遅れると手術ですべて摘出出来ないことになり、また抗がん剤も確実に有効な薬がないのが現状です。

ですから、検診・胃内視鏡検査を積極的に受け、早期発見・早期治療に努めましょう。

当院では、胃内視鏡検査はもちろん、早期がんの内視鏡による切除も、外科的開腹手術も可能です。胃がんのことでご心配のある方は当院の消化器内科または外科の受診をお勧めいたします。

